常山紀談

十一二

113
561
6

イ13
561
6

備前藩 湯浅先生編輯

常山紀談

書肆 千鍾房
宋榮堂 製本

三帙

常山紀談卷之十一目次

一 竹中重治心掛の事
一 岑澤某謙信を撃んとせし事
一 久世三四郎 坂井三十郎 物見の事
一 野々口彦助抱負の事
一 石谷定清御供を叅る事
一 坪内玄蕃心得の事
一 道化清十郎 平野與兵衛と對面せし事
一 谷太郎左衛門 物前心得の事
一 可児才蔵が事
一 石田三成が事

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

一 関白秀次公生害の事 附吉田修理ゞ事
一 木村常陸介寂後の事
一 秀吉有岡城へ使者よ行きゝ事 附河原林越後山脇源太夫ゞ事
一 成田助九郎誅せらゝ事
一 秀吉公連歌の事
一 三木牛之介鍬形の詩哥ゝ事
一 谷大膳武勇討死の事
一 戸川肥後守秀吉公を賀ふ事
一 黒田如水先見の事
一 秀康卿伏見よて妓女國ゞ舞を見給ひゝ事
一 直江兼續ゞ事

一 石田三成直江兼續密謀の事
一 兼續惺窩先生よ逢ゝ事
一 石田ゞ黨 東照宮を謀奉らんとせゝ事
一 細川忠興忠告の事

常山紀談巻之十一

備前國　湯淺新兵衛元禎輯録

○竹中重治曰分不過くる價を以て馬を購ふべからず其馬不乗る時能き敵と見うけ追詰て飛下んと思ふ歟或ハ又鎗を合せんと下り立時馬副の人れ續らざれバ此馬人のあふ物なべし又かゝる馬ハ得がたくと思ふ心出て期を延もてゆるふ此能馬ゆるふ都て名を失ふ事もあるべしかゝる士ハ金十両ゆく馬を購んとすゝふ五両ゆく永むべしをしげもなく飛乃り乗放ちて能き財ハ捨ゆゑ五両の金ゆく又馬を永むべし馬よりかゝるべし此心得有べきなり身をも義ゆゑ捨るべし財寶をや惜ども思ふ心掛常ふるべきこゝろ士の本意なきと我

北條家の旗を預かり諏訪部と云ふ者度々功名あり何まこの時
の軍ふや勝田八左衛門と云ふ者二人物見より出る敵不意ふ出く
たけ来るふ二騎引取る時諏訪部ハ馬を領る故勝まこる馬よ
乗こ〻故乗切く池帰る勝田ハ後まこるの敵追詰こまバ下立
く相戦ふ味方助来まバ勝田打伏らま頭半切まこる敵引取
こ〻ふ勝田助らじと思ふ勝田手ふく頭を持上げいまこ死せ
ばこふ人々ハ棄て帰こやと云ふを聞く助けく帰ア〻り勝田も
度々の功名あり後松平右衛門大夫ふ仕へこるの○竹中が論ぜし士
こる者の知べき処なり弓箭取身ハ朝夕ふ軍旅の事を論ぜん
事あ〻ま〻き事あり時〻ハ必天の冥加ふ尽べきあり戦
國ふ生まれ人ハ其事ふ臨て功まく禄を得こふてこそあれ

今泰平の時ふ生まれ父祖の蔭ふく禄を世々まするハ天より
士ハ職を命ぜ〻まこ〻ふ天より命ぜられこる其任を忘
まるんふハ天の冥加ふ盡ん事必定なり又天下の四民ハ上
ふあ〻く下ふ鎮こ〻職ハ〻ろそにせんハ口惜こ〻べき事ふこそ

○謙信の許ふ岑澤何某と云ふ士罪有て放逐せ〻まこるふ越中の
椎名ふ奉公こ〻謙信越中へ師を出さまこ〻時彼士義まかくれ
鉄炮を持こく伺ひ居こ〻りしが俄ふ鉄炮を傍ふ投捨て泣居こ
る謙信見出こ〻ていふ岑澤めづ〻こいとれこふ出ばらわれ
仁君智将を討奉らんと存ぜ〻事悔こく成てハ今遥ふ見な
る〻く先ふ屋形の心ふ背たる又かこ〻る設けを工こ〻ヤ度此上もな
き大罪まてんとこ〻く首を刎らるべこといひく〻こまま伏れれバ

謙信打笑ひ吾は智仁とハ相應せざる虚名なり疾池帰りて
椎名ふよく仕へよといへまつらどもかの士越後よ帰りて農夫と
朱く一生を終へてうとうや

○東照宮何まの時北軍まや久世三四郎宣廣坂部三十郎廣勝
二人を物見よ出しまふ坂部ハ勇めるあり久世ハ氣色甚悪
うへへうば側より笑ふ人のみふ　東照宮坂部ハ天性
の剛ゆ若あり久世が及ぶべきよあるまじきまでゆ久世ハ人イ
劣て生甲斐なしと宮ひ定めまる者ゑ其故よ務てたぐむゆ
心を労して其ゆき顕まてゆ今見よ久世ハ坂部よりも敵
近く進ゑ行く見て帰らむ抜ゑと仰ゆる処よ二人帰りて
ぶ呆して御詞のぬくあるゆを　東照宮坂部ハ生得ゆ勇を

頼ふまく懈あり久世ハ勵むをもて味ひ深しゑ慈ぜさせるひを
○明智光秀ぶ士野ゑ口彦助山中鹿之介よ多く功名せん事
を問庶之介物まんよハ必目の明ぬものゑ能分待らまてよといよ
彦助さゆる事ともおもてゑ其後何まゆ戦ふや川際よ出ゑ口
打出まる処よ朝霧出ゑ物色見え分ぬ時ふ山中ぶ教へ
しるを見ひ出しまよ綱をいへ爰ふく目ぶへゑぬといひしを
吾後まゑゑたんと目をふさゆ心を鎮めく目をひらゆる
ふ川の半よ物具しゆる武者大差物を指く只一騎渡ゆ来る
をへ付く心もさハやうに目も明ふ成まゆ押並べく引組で
おち首を取ゆ後よ彦助ゑも我真実の功名ゑはあまじ
彼敵大ざまよ身の疲まく輙く我よ組敷まゑゑん彼

敵も物前に目がくらみざりつらんと語りき

○石谷十藏定清ハ先祖ハ遠江石谷村の人なり大坂御出陣の時江戸に残させられし所に御跡より従者一人に具足箱を脊に負せ自ら鎗を荷ひ潜に江戸を出駿府にて追付奉りしかバ兼て心易かりし御近習の人々たより江戸に残りたる口惜く存重き御法を破りて参りぬ首を刎られん事ハ素より覚悟なる事なりけれバいかに御勘当ありとも露ばかりも悔む所ハなしと申上てなげきけれバ　将軍にハ殊に法制を厳に思召けれバ争か御ゆるされのあるべきや御宥ありともにハ御かへり引つゞきて追々に来るべけれバ必烈しき刑に行はれずとも捨置べき事なきよし申せしに

台徳院殿黙しておはしけるに十藏ハ既にかへりたる聞えたる上は今夜か明朝ハ首を刎られんと相待居たりしに十藏とのべとて召出されたり思ひ極めて進み出けれバいかにして法を破りたるやかくる奴ばら切て棄んやと思へども若き者なりけれバゆるすぞよと仰出されて黄金二枚賜りけるさて江戸へハ重ねて誰人なりとも一人も忍びて御供に参りなバ重罪たるべしと固く仰出されけるとなり

○石谷十藏定清坪内玄蕃に向て度々の功名世に高しいかで心掛ありて功名を遂べき道もあらバ教へられよといふ坪内聞て能こそ問れたれ人の事に臨て神の力を頼み八幡ぞといふ我も又頼みてハ相ぶのふなりて成就せじとぞいへり

我ハ毎も八幡とゝ弟を刺通さんと一筋よりひて後まを取
ざりしといひしとぞ
○道化清十郎ハ美濃の人ゆく信長ゝ仕へゝ度々武功勝まる
まゝよ信長清十郎が指物ゝ無双道化とゝ四字を書て與へ
らるゝ〳〵ば世の人無双ゝ化といへり平野與三郎ハ齋藤家
の士なるゝ是も武功誉まゝるゝ信長ゝを招ゝ時人と
往て手形ゝ對面ゝるゝ道化も打連ゝ物語せゝが道化いゝ
法名ハかゝゝゝ先立引ゝ殿ゝ聞其趣を委〳〵語て教へられ
よゝいへば平野更ゝ心無ゝもいゝ齋藤家ゝ冥加ゝ叶ふ
士ハ皆ゝ付死〳〵つ吾生残ゝゝ重ての軍ゝハ必死とゝひつまた
武勇の不足ゆゝゝ死を遁ま今日の向ゝあひ恥の上れ恥ゝあひ

ひとゝ答へゝまゝバ只今ゝの答至極の理まて先ゝ後殿ハ必死
を不志〳〵てハ成ゝ〳〳〳〳大小誉て感〳〵ゝ
○谷太郎右衛つハ武功の士ゝゝ黒田家ゝ客の會釈ゆゝく招き亟
まゝゝ谷ゝ曰軍れ場ゆゝく先敵より味方ゝ氣を付べし
一人先ゝ進出踏〳〳ゝ怒ゝ跡より二人三人行重〳〳バ始出〳〳る
者を強とゝ〳〳べし其処へ切べ〳〳ゝ吾ハ又別の所ゝ独踏出
てこゝゝ居〳〳べき志せよゝば〳〳くすまバ又其処へ味方つゞく
ぞ〳〳又日比心安きゝ人のゝゝ主君小寵愛せ〳〳ゝゝも軍場
少て其人のかゝゝ〳〳ゝ寄べ〳〳ゝ必獨立の心得ゝべし又士は
弓鉄炮れ上手といゝ〳〳〳事好むゝまゝ〳〳敵を打立てゝ時
う或ハ城へ射込〳〳ゝ事のゝんゝ足軽ハ進〳〳ゝれゝゝ人を

して命のがれん時射あてぎまでハ面目なく危き場ハ敵も堅
くなるものゆへ多くハ犬死する事なりといへり
○可児才藏吉長ハ尾州可児山の人なり大剛の者なり篠を
指物の首をとりて篠の葉を口中ゆ押込投棄て後の證とす
るなり世の人篠の才藏といひ傳ふ関白秀次より仕へ長久年
軍ゆ秀次引退まつゆ岡本嘉介村善右衛門等踞とぐまりく
支へゆ才藏ゆ来りをとりく山ゆ倚かゝる心地をしなりさて
才藏殿ハ何方ゆでと問く其退まつる方より行きり目前の敵を
見捨て引退ハ聞しゆも似ぬ才藏なりと論ずるゆ或日聚
樂ゆく語りをりて才藏ゆいるゝ所存をしやと問才藏ゆ
て何心なく殿の仰を慕ひしるだりとき今人々の論を聞よ
ばなりさゝバ眼中ゆて宿へも帰らず直ゆ立去りり後ゆ福
嶋正則招て七百五十石の禄を與へらるる才藏ゆ下人ゆ久右衛と
いふ剛の者あり才藏其禄の半分を與へ竹内久右衛門といふ
才藏ゆ墓藝州廣嶋ゆ在り
○石田治部少輔三成ハ近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者
の子ゆ幼くいとけなきゆ佐吉といひしゆ家貧しく近
き寺ゆの寺ゆやゆ在りり或時秀吉彼まゆ行き佐吉ゆ明
敏なるゆ呼出して側ゆ仕へしゆ頻ゆ禄を増し水口四万石與
へらるゝ後三成ゆ人数ゆ招きくんと問まつゆ鳴左近一
人呼出しゆ秀吉ハ世ゆ学ぶ者ゆ汝ゆ許ゆ小禄ゆ
ていで奉公すべきといへりしゆバ三成禄の半分をゆ二万

石典へんと答ふ秀吉聞て君臣の禄相同といふ事なりとよ
雖も傳へ聞いきほひある其志なるべしハよも汝ハ仕へじ
〳〵も討ひしがれと深く感ぜしも鴻を呼出してまづ
羽織を與へ〳〵是より三成ハ能く心を合せよといへまこと三
成佐和山を賜ふる時島ハ禄増與ふべきまでいひまでも
禄更ハ不足ゆもれいぞ他の人をハ賜ふりへと辞〳〵左
近ハ父ゆと室町将軍家ハ仕へ江州高宮の傍ハかひなきを
ゆて隠居〳〵を三成招き出〳〵の

○秀吉秀次を賞ひ〳〵関白を譲り夫より太閤と号し文禄二年
秀頼誕生あり秀次よ〳〵ぬ事ども多く有りまバ文禄
四年七月八日三成太閤の前ハ出〳〵関白の謀叛既ハあ〳〵
〳〵て證を正〳〵る書を見せやをバ太閤怒て宮部善祥坊
堀尾吉晴ハ下れ〳〵て疾伏見ハ来ら〳〵ら一先高野ハ退
き申ひ〳〵たあるう二ッの中よと云送らまつりば秀次畏て暴り
ゆて其後粟野木工頭秀用白江備後守成定熊谷大膳亮
直澄三人ハ此事いぐ有べきと問ふハ白江聞もあへぬ殿
下只今聚樂を出のりん事然るべ〳〵れ此三人の中一人伏
見へ参り〳〵抱さぬ罪を申開くべしかるハで討手来らバ防矢
射〳〵思召定めらまん外他あらんやと申に熊谷此謀左さ
る事なりまてぐ帝都の騒ぎとなるん事其恐なるあり
ぐまま〳〵謀叛人といそまんも口惜るべし父子の礼儀なれバ
都を出〳〵東坂本ハ趣き讒者を糺さまん事をハ待ぞし

法許されなくば唐崎濱ゝ打ゆく勝負を決するの外道なり
とぞ申さる栗野只今危きを逼て省を請ても聞入らまで
迚も遁まじぬ所なまじ今夜伏見を押寄て屍を城ゝ出さ
ば婦人の縊まして死るぶ如くなるんハ口惜き事なりとて
されども秀次これ用ずして高野山に趣きたるぶ
一説ゝ吉田修理此時やるハ謀叛真実よおそれまじ
人數一万我ゝ負ゝまじ今夜伏見を夜討して只一時ゝ城
を奪破るべしといひたれども聞入ざりしかあ修理後ゝ
越前秀康卿ゝ仕へ大坂陣ゝ忠直の供して先陣きり
五月吾天王寺口の御先手加賀利常ゝ命ぜられしかば
忠直甚怒られて時本多伊豆守然らば明日ゝ先ゝ出て

加賀の軍兵を蹈越えおりゝ修理の軍せんかゝる事ハ吉田
修理よく決断せる者ゝとて呼出れ修理ゝもあへぬ
夜も短くゝ早支度して打立べし人を續ゝて言捨く
已ゝ陣所ゝ帰るゝ否やひろくゝ物具して先ゝ出て加賀の
軍兵の押ゝ所ゝ修理馬を乗寄せ今度の命ゝハ岡山表ゝ
加賀天王寺表ハ越前の三河守先陣を乗ゝり各ハ乗ゝ
やとゝも人ゝ真一文字ゝ押破りかけ抜ゝまじ越前の軍
兵おくゝ修理ハ今日必死と思ひ定めゝまじ本多忠朝
の陣より鉄炮を打かけゝひくく死やくゝ聲ゝ呼
ゝり真田ゝ陣を切崩し北ゝ敵を追ゝ天満川の深ゝ
馬を乗入ゝ溺死しゝるゝ

青巖寺ゆゑ自害ありかの三人も所をゆて自害せり是三成
太閤の没後世をくらがへんべき者なん先関白を失ひ奉ると後
ゆゑ人申しける
○関白秀次高野の青巖寺ゆゑ自害ありしまこと事を司ど寵愛
せしまま一人ゆゑ誅せられ自害しける中ゆ木村常陸介
師春検使の松田勝右衛門ゆ向ひ今度関白聚樂をゆく伏見
ゆ趣うせめりんと定めしまま時師春申ぬゆハ太閤御對面ど
ゆちなりまさんゆハ讒者のちく明らん給りんさまでも夫まで
ゆく中途より遠國へ放流せしまゆかひるく御分を自双
ゆ伏ゆりん必此二ツの間ゆ一あいまま太閤の使者を斬て捨
諸侍の妻子聚樂ゆゑを人質ゆ取罪ゆ為事を申聞せゆ

ゆゑ一さもりんゆハ和睦も堅く定ゆり又戦ゆと勇名を遂ん
べ一空一聚樂をゆさせゆゆ格や有べきと再三諫めゆられど
も吾太閤ゆ敵ゆる心なりして兼引ハゆり給ゆ然ゆバ関白ゆ於
て異心ゆ一ゆ一ゆ事明らなり此旨を達して給りゆバ其ゆ
恩黄泉の下ゆと忘るべうしゆと云ゆるを松田折を得く
秀吉ゆ申給れバ太閤木村ゆ志を愍く妻子ゆ米百石を與へく
京都誓願寺の近所ゆ住居せしめぞ
○秀吉信長の使者ゆ一荒木村重ゆ有岡の城ゆ来る村重ゆ
士河原林越後守治久ゆ捕めゆつらたゆ一ひ遂ゆハあゆをなん
ゆ一今刺殺ん事易かりんと村重ゆさゆやゆ給まゆゆ村重聞
入ゆて此事を秀吉ゆ語ゆゆまバ秀吉治久ゆを呼ゆ出して懇ゆ詞

をかけさせ給る脇指を抜く引出物ゆゑ給る村重指替のなのゝてといへゞ秀吉吾刀一ツを頼ゝて信長ゆ奉公する者よ非ざといをれゝり後秀吉世を平げて治冬々を除く悪ゝ ちゞ出して殺さまゝるゆ治冬々君の為ゆ其仇を除くハ武士の常ゝ事なり秀吉舊き怨を忘まゝ無道なりといひく死〳〵ゝゝ

秀吉河原林よ與へらまゝ脇指ハ三條吉廣ゞ作なり河原林ゞ舊友山脇源大夫重信よ傳へゝり山脇ハ摂州の人幼ゝ ゝより勇名の聞あり甲州よ往て内藤修理ゞ許よ其後摂州よ帰ゝ荒木摂津守村重よ仕へ頻ゆ用ひらまゝて長臣ゝり村重神田伊賀守と軍の時神田ゞ軍奉行郡兵大夫ハ勝まゝ剛の者なるを毛付ゝて討取ゝり凡首数九十八取て首供養三度せゝゝゝと荒木亡て重信中川清秀ゝ許よ隠まゝ居ゝり清秀の妻ハ重信ゞをぞく前田利家柴田勝家丹羽長秀一万石をもく招まゝゝらゞも引籠ゝのゝりゝを護國公池田信輝公懇よ招ゝせゝひゝらバ来仕へ山崎合戦よ明智ゞ士大将丹波國ゆゝゝゝゝといひゝる城を預ゝ居ゝる村上源之丞と馬上ゆゝゝ鎗を合ゝ山脇ゞ鎗ハ十文字まて村上ゝ馬の額よ疵付る疵おゝまバ源之丞馬より落ゝるを従者加け来ゝ助るを源大夫詞をかけ村上と引組ゝる所を味方数多ゝ合て村上ゞ首を得ゝり其後も功名有て士三十騎の将ゝり

○秀吉北國に赴きし時丹羽長重の小松の城に立寄らるに長重の
士成田助九郎といふ者有て秀吉先殿を北陸道の管領にせんと
志津が嶽にて約束ありつるが加賀二郡越前若狭を賜はらぬ先
殿過させ給ひて後小松十二万石に減じ既に滅亡に近しともいふべし
秀吉の不義憎むに餘りある臣に討手仰付られよ輙く刺殺すべし
といひけれども長重聞入ざりしてさて止ざるを秀吉いかにして
洩聞き給ひけん大に怒り成田を憎むこと甚しかりければ成田小松
を退て伊勢の朝熊に隠れ居たりしを終に捜出して殺されけ
り成田が子半左衛門長重に仕へて小松の軍に戦功あり

○秀吉或時紹巴に向ひ吾発句せん汝脇句せよとて
奥山にもみぢふみわけなく蛍とせられし

しかとも見えぬ燈火のかげ 脇紹巴の句なり
紹巴蛍は鳴虫にはあらずと申す秀吉聞て蛍に声なくとも吾鳴せ
んとせば鳴かしてや有べきといはれし時細川幽斎かたへより
武蔵野や志のをつかねてふる雨に蛍より外なく虫もなし
といふ古歌のありといはれければ秀吉悦ばれしとぞ
此歌は蛍の声あるにあらず心には鳴虫なれど雨降る夜は皆虫の鳴止
むるまゝバ光の見ゆる蛍より外虫なしといふこゝろなり

○三木牛之介は畠山高政に仕へて剛の者なり五尺ばかりの鍬形
打たる冑を着て運在天見敵無退又入へと呉はしかぬるを
よかりたれ軍ありにも先がけをせバとよめるうちを鍬形に書き
ありしが天文十一年正月河内の合戦に一番鎗を合せ敵の大将を

討取しより天文十六年七月廿三日三好政勝入道宗三と舍利寺の軍小討死しけるを後此哥の事を秀吉ふ物語する人ありしかば秀吉歌の趣意よろしからざる吾なしバ人ハ出でさ出ることはしりそまき軍の時も先がけをしてとるべきおもをいはまくさり

○天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時谷大膳ハ濱手の大将なり兼て大膳ハ寄騎ふと秀吉望まれしかども信長許さまたしてかつ勢しなる大膳敵三騎と馬上にて鎗を合せ皆討たしより秀吉疾かさの丸出の名さ攻らまとりへハ大膳城堅固にして容易ふ攻る猛しと答ふ秀吉日頃勇名ある紀大膳小城一ツ破るやと詞をかけらるれバ大膳も怒を

秀吉も既ふ刀の柄ふ手を懸べた色なりしかば竹中半兵衛立ふさぐり戦場の勝負ハ力を尽すべきよいふ事ぞと云ふ処ふ蜂須賀彦右衛門も来りて秀吉の轡を取て押返し夜ふ入て秀吉酒肴を持せ大膳が陣屋ふ到りそふの武功抜群なり先の問答ハ我過ふく後悔大方なりしとて懇情甚し其後大膳手勢を率てかはの丸へ攻かゝる城中もこれを大事と防ぎ矢石を打出せども大膳少しもひるまず士五十騎歩卒二百計一の城戸口を押破りて多賀死人数を捨しに寄手押たゞけバ大膳念なく無破うるゞ数ケ所を負て踞居しを法師武者猩々皮の羽織着さるが引返して大膳ふ向ふ大膳吾疲まてり近寄て首を乞て

高名よせよといふを聞きて一太刀打つ大膳敵の草摺を取て引寄せ脇指を抽て刺貫く処に別所が士大将由井小兵衛と名乗て引返して独来て大膳を一太刀斬て倒る処へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄て生てみうけて由井を打て其居に打ちて忘押へて首を取て父に向へば大膳も息絶て出羽は父の死骸を陣屋に入て取出る首を秀吉の実検に備ふ秀吉大膳が討死せし由を聞て せめて死骸に なりとも対面せんとて陣屋に行給へ人を付せるよりて涙ふむをぞ流しける

秀吉家譜に載るるは大に異なれ然れども此一条は谷の家に傳へ出る説なる由なれば家譜は誤なるべし

大膳は江州犬上郡の人信長に仕へて川尻肥後守稲葉伊豫守と同じく軍れ評定の人に加へられる十四才より四十七才まで鎗を合せる事九度首を取る十七度なり

○浮田秀家伏見に秀吉を饗せる時廊下より行く処の白砂の上に戸川花房を始として並び居て拜謁に秀吉戸川達安に吾をおぼえいまするやと問給へば戸川秀吉を見まして書院に出給へ秀吉かくるふるまひ多うまれば其より〳〵て古式家の礼儀も多く失ひ〳〵ぬべし

○秀吉病重かりしかば朝鮮渡海の軍兵を引取んと計らるる時朝鮮へは必徳川殿赴かせるべし〳〵日本は自ら徳川殿に帰服せんと人々いひ〳〵処に思の外に秀吉石田

三成に命ぜられて朝鮮に赴きくりさせて日本の權威は
三成に帰せべしといふて黒田如水擢是を然るべきぜ
朝鮮の事三成に任を業るより日本は徳川殿の掌中に
ありと賛る三成是より伐て人是を嫉ましむ徳川
殿の仁徳に靡き従ひて日本は自然と徳川殿に帰服せん
といふまでが果して然りき

○越前の秀康卿伏見にて國とふ妓女を召て舞せしめし
時襟にかけたる水晶の珠数見苦しきまで物具の上にか
けたる珊瑚の珠数を賜りたるが忽ち舞る時頻に涙を
流しける人を怪しみられば秀康卿今天下に幾千万の女あ
またぐる天下一の女と世に誉らるる名高きは此女なり吾天下

第一の男と世にいはるるあの女さへ劣て果てしとりへが
泣まどふと仰有けるとぞ

○越後の士大将直江山城守兼續は朝日将軍義仲の乳子樋口
次郎兼光が末孫なり謙信に仕へて景勝に到る景勝奥州
にて百万石を賜ひし時米沢三十万石を直江に與へらるる倍臣
の中第一比大禄なり長高く容儀骨がゝ双なく辯舌明らか
に殊更大膽なる人なり且文藝ふも暗からず五臣注の文選
八此人板行させしなり詩をも作りて

春雁似吾吾似雁洛陽城裏背花帰

などいふ句を世に聞えたり伏見の城にて諸大名幾等も並居たる中に伊達政
宗懐中より金錢取出して人に見せまして其頃金錢

の始めて比類なく珍しくもてなやさる直江が末座に有り
をさまれるまゝとみて時直江扇の上に金錢を置て折ゝ
女童のたゝくやうにして親しらば政宗いや苦うもいで手
にえまてと云も終らぬに直江謙信の時より先陳の下知して
毫取いるふかゝる賤しき扇に載てはとく
政宗のかゝる投戻しくに兼續父も山城守といふ僧なり
しかも還俗して武勇を事とするを
○石田三成或兩夜のたまぐ成しに直江を近付私語るに卑
賤より出て天下を治るハ大丈夫の志なり我豊臣家の恩深し
太閤斯世をおはしまさん中ハ思ひ立べうもなくて終るハ
旗を揚天下をとるべやと存るなり其時徳川家父子をバ如

何して討亡ぼさ武略を巡らしんやと語らふに直江此
を幸ゝやものいひん是こそ志を西に上ぼりて徳川父子
関八州を領して且蒲生氏郷といふ勇將に親しきあり輙く勝
べゝ先氏郷を滅して景勝に會津を賜ふたらんや然らば
吾景勝に謀ふく旗を揚我先陣して師を出べし其時西
國の諸將こゝをかゝひ押きて関東を討亡ぼすべきと
おもし相謀ふ終に氏郷を毒害し後秀行八十万石の地を
削ゝ會津を景勝に秀吉賜ふるハ此謀より事起るといへ
○直江兼續惶高藤敏夫に面せんといへども肉入らぬ兼
續ハて行ぎるべきバ不在あり度を招けども行ざるに今日来り
ゝゝと逢ぶ偽て他に出るるやと思ひんとて直江が許に行き

ふ直江其日関東ふ赴きしかば跡を追て大津ふ至て對面
いたす直江慶長しる家を急ふ取立る時人臣の心得ハいかと
問惺窩事を速ふせんとせバ却て敗る基なりとぞ答へける
後ふ直江景勝ふ進めく旗を揚させ必家を滅さべしと惺窩
いさめしが果して景勝ふ事を起させしるが其功なきざるき
○慶長三年八月十八日太閤逝去其比　台徳院殿伏見ふおハし
まして太閤の病重ろしば関東ふ赴くせるん事延引な
りしが俄ふ十九日伏見を發して関東ふ帰らせるふ是
東照宮遠大の神慮なるべし四老奉行内々相討て徳川殿伏
見ふ有て権威日々ふ増長なるべし秀頼公を早く大坂へ移し
諸方一同ふ糸集りく尊敬さべき事然るべし　東照宮

強て申て同四年正月十日大坂ふ移居ける　東照宮も送ら
せのまひく大坂へ御出あり片桐東市正且元が宅ふ御止宿あり
そるが十二日のいけがのふ俄ふ打立なひく淀川を御船ふて上
らせのふまふ枚方近く川岸ふ人多く群集ろり若や謀奉る
叛反の者ふ有べしとて近く寄ふ処ふ井伊直政が足軽とんもうと
申者あり程なく御船近く成ればく脇五右衛門などいへる物ハ
跪きて待なりく頻て伏見ふ入らせのひぬ
又此時御乗物ふハ村越与三右衛門を乗させのひ
東照宮ふハ倍者九騎馬の中ふ御ましまと有ようもいへ
ア又井伊直政ハ馬上ふく御迎ふ出物具くして其上ふ常の
衣服ふくり直政が者皆下ふ具足と弓鉄炮の者

彼是二千計ゆく〳〵糸孫より御愛あり〻る跡八鹿毛を引来り
〻まゝば其侭打殺せのひく帰らせのふもいへり
此頃既より世間さはぐ〻よ云ふ〻〻いろある事ゝ出来らんと人〻
あやぶゝおもへり　東照宮も御屋敷より大竹よて菱垣を結せ
らまし御門を押閉き敵寄来らバ堅固ふ防ぎ〻せのふべき
設あゝ御門を開く事然るべ〻ぶとゝ者おゝ〻〻ばゝ門を
閉て守らバ敵より侮ら〻なり只押〻まゝて軍の支度をせよ
と仰有〻るゝとゝ京極高次参ゆく大津の城へ引移らせら
まんやと進めゝされるを聞召敵寄バ上の臺へ押上げ金札の
宮の邊ふく〻真丸よ知〻く「合戦ゝ〻〻吾兵二千計やあゝん
敵何萬もあまし打破る事かゝ〻〻ぶと仰らまゝり正月十九日
安國寺瓊長老生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帯刀四人
東照宮よ参り〻く伊達政宗福嶋
四老五奉行の使ゝ〻〻
正則蜂須賀至鎮縁組の事よりく徳川家獨檀ゝ〻事ど
と豊臣家の爲ゝ〻〻ぶる由申旨あり依て世の中愈さ
わぐ〻ゝ風説あゝ其頃榊原式部大輔康政伏見よ上るゝて
二月九五日尾州宮ふ居〻るゝ伏見の騒ぐ〻き由を夕日夜道
を急ぎ〻く〻ゝて〻ぶ〻〻ゝて〻きけバ伏見よて既よ　東照宮の
御館へ敵押寄〻〻りなぐ〻いひふ〻ゝ居ゝ廿六日の晩膳所少て伏
見よりの飛脚より行逢いゝぶ弓箭ハ始ゝりゝさぬとゝふゝ家
康政悦んで則膳所より陣し〻秀頼の下知と称し〻伏見の騒より付
東海東山両道の人留ゝ〻ゝるゝとゝふゝまゝさせ勢田矢橋を三日押留

さて其比の騒しきさま諸國より聞傳へ京伏見に集る人殊外多かりしに押留らるゝ草津野洲を始として何万といふ數計なべてなれば扨康政三日の後未刻に構へたる関所をひらくもされば旅人一同に京伏見に入る康政膳所を立て七千計の人を率ゐて伏見へ入るべき京より関東より數万の軍兵池を堀り山をいとなみて康政小具足着て鉢巻し馬ぢかに押立てられば御前に召て御ものゝ御のをもてなさるゝ康政下知して御藏より料足數千貫出させ分波し内府の軍兵六萬まゝかけ出すべき館ゆく兵粮の用意俄に設けらるゝとて店屋物を買来らしむ數千人京伏見淀に馳回りて赤飯菓子酒やゝの類一ツも残らず買来るべき関東より十万の軍兵集まるとて人々思ひもよらぬ者もなし是に依て石田が謀臣しゝなるべしとて

東照宮柳生又右衛門ハ石田が士大将嶋左近と同心のよしにて懇なりと聞召て左近方へ行て内密にして彼ハいかゝ様に聞て来まして仰有しかば柳生左近に逢て世間の物がたりいふ成べき事なんといひ給べ左近笑て今松永明智二人の智謀決断ある人なるべ何事かあるべきとて笑ひ給ふ此子細ハ或時石田密謀に及び給ふに左近豊臣家の為を存せんに斯あるべで止べきやされども爰に存る旨あり大事を企るハ我志に慮を無二無三に決断して水も猶豫有べからず去年より度々仕課もべき図を定めて事多し既に時を失ひぬ能々世のありさまを考へるに石田の家を悪む人々大

徳川殿ゑ心を寄せられ當家の存亡計るべきに一日のゑんも殘
多く只理を非よまげ〳〵唯今まで疎遠の諸大將達へも屈り
くだり〳〵遺恨なく射ひて交を親しみもづ〳〵く時を待べきも一ツ
の計策まてこそといひやまバ三成さまバ縱令一時ゑ能志を遂
るとも後の安らゝべき樣を計るべきといひるゑ左近いやく
事能く一時ゑ勝を得るゝバ後ゑ何の危き事らひべき内府ゑ
親しき人々を積るゑ其兵二万ゑるべくして味方素より心を合
さるゑ大國の人々又近國の兵を集るゝも忽馳寄て五六万ゑハ
及ぶべし景勝卿再挙を取て下知し関東を攻破らんゑ何程の事
ゝ思べきとて又存る旨をいひ出るゑ客の来て三成坐を立
ゝ入ハ樫原彦右衛門居殘りて左近ゑ向ひいふも仰さる事ゝ

松永彈正明智光秀ハ無双の悪逆の者なれど事を決斷する
ゑ誰ゝ相並ふべき此詮議の破り樫ゑ頼むべきものをといひ
るゝとゝや其ゑよりく柳生ゑハ答へるゝとゝゑ

○石田三成を始め相組さる人々加賀利家を推そゝて　東照
宮を傾けなんと日夜相謀まゝり利家の長子利長細川越中守
忠興を招きて累年親しゝる間蔑ゝびさゝるゑ危ふゝんを
扶るゝんやと問るゝゑ二代の知音ゑてらんバ耶兼畧はゝ〳〵ゑ
らる利長左斯こそ有べくも頃日石田三成小西等相計づく内府
の向島ハ皷を攻圍んと議決しぬ潛ゑ知らせんぞと語らまゝ
忠興熟〳〵と考て日比の親しゝ斯る大事を告知らせぬ事淺ゝ
らぬ事なり心得ゆひぬ明日參りく申合はりんとて帰られるゝ

是ハこれより前　東照宮ハ藤森よおもむくるゝ井伊直
政が士木俣土佐もの風よ奇〻て御館の隣なる宅よ火を
かけあんハ危き事なりと申ゝまゝたゞ　東照宮御寢所へ
土佐を召て具よ図〻召まゝ其翌日向島ようつゝせのひくを
直よ向島へ参て　東照宮御對面有〻ゝバ忠與近習の人を
屏けて只今参る事別の子細もいなゞ石田等黨を結び利家を
依頼とゝて君を亡〻ゝやべきと人止ハ利長と年頃の親〻ゝ
よりゝく具よ洩美ぎぬ彼等ぞ謀よ落ざる御設こて為るべく
ひゝ〻ゝきさるゝを聞〻召過ゝ年信長攝州出陣の比弱年
にて武勇の誉を有〻ゝ申通ぜ〻ゝ斯る深志ゝ〻ゝとを
知ざりゝる悔〻きよと悦だせのひく榊原康政を召ていゞ

有へきと仰有り事急よれ後まゝて八人よ制せ〻ゝるべ〻とゝ処て
忠與國の半すけハ人の與きゝるゝ家一ゝれへバ浅野幸長を召ま
れへ彼ハ必徳川家よ心を寄べ〻ゆゝきゝゝれバ頼て使を走らせ
らゝふ取あへぞ参れゝゝ忠與出向ひく事の子細を語ら
ゝよ人多き中よかゝる事を知せ〻ゝ事　交のかひ有かゝ附ハ
疑の生じ易紀習ひよゆゝて忠與幸長先誓紙を書てまゝぬ
若敵きゝせバ幸長ハ守治川を固めゆひゝん忠與ハ敵の中よ折交
て不意よ一軍仕べ〻ゝとぞ相計らまゝゝるさまゝゝ是も始終
勝を全うせべきゝゝるもあゝぞ利家と和平有ゝ踰る事ゆは
只両人よ任させゆひゝへ〻ゝく其翌日忠與風よ利長の許よ彼向
ひて昨日の書集一〻内府よ告〻ゝとぞ語らまゝゝる利長色を

変じてこれをも戯るゝや実るゝやと驚きたゝう忠奥さまゝバ愚者も千慮の一得は此事を忍ぶるゝ石田謀で両雄を闘ハしゝ其弊こゝ辛ゐんと料こりのるゝ両雄相闘ひゝく亡びゐバ安藝の輝元備前の秀家などを大将ゝて吾等が如き者ハもちゝく攻平げゐん所存見顕しゝ寛仁の内府ゝ與しゝてゝて家をも起さゝ屋ゝまゝ三成と心を合せて名を汚し身を失ゝんハ必定ゝてゝかく申ゝ詞を許容ゝひゐば少ゝく内府と令親利家と和睦有て世穏ゝあゝん事ゝて然ゝべゝゝゝん是全く前田家を佑るゝゐゝくゝゝと詞を盡しゝて規誨せゝまゝゝらバ利長も深く思慮しゝて道理ゝ當まゝる事どもまゝてゝさゝバ父ゝやさバやゝて利家ゝ斯と告て利害を詳ゝ語られゝるゝ利家も諾せゝまゝゝ

又一説ゝ五老五奉行の内争論不和の事あゝバ生駒雅樂頭親正中村式部少輔一氏堀尾帯刀吉晴三人和平を取計ふゝゝゝと兼ゝく太閤の遺言ゝ因ゝく井伊直政ゝ就て和平の事をたゝらまゝうゝもいゝり

常山紀談巻之十一終

常山紀談巻之十二目次

一 東照宮細川家の難を救ひ給ふ事
一 七人の大将石田を討んとせし事
一 東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立せ給へる事
一 東照宮花房助兵衛小起請文を書と仰せられし事
一 下野國小山より上杉入菴義論の事
一 渡邊惣左衛門野中市左衛忍て大坂へ使せる事
一 上杉景勝會津表手配の事
一 東照宮小山の途中ゆて竹を伐せ給へる事
一 伊達政宗膽氣相馬の城下へ宿せ給へる事
一 竹村半兵衛田中長龍を押止る事

一　岐阜城攻の事
一　森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事
一　南部越後母衣串をぬらざる事
一　兼松又四郎一柳の陣見切る事　附　兼松武功言上の事
一　山田多門兵衛幼年功名の事

常山紀談巻之十二

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○関白秀次生害の後細川忠興の家小罪蒙るべき事起まりて其子細ハ秀次當時の大名財用乏しきよハ潛ひ金銀を貸しまふ事あり是ハ人ハ心をらんがゝる且ハ財を利せんが為なりまた忠興と黄金二百枚をかりまくまゝバ彼家金銀出納の事を司ゞれる人急ぎ彼金返しまふべし券契を破り捨べし左ふらんまは太閤の奉行ま券契を出べしとぞヤるる忠興いらまと叶ふべうもなき此事太閤ま泄聞えあバ罪科ま慮せまくもんす然ひなしいなすべきと案じ煩ひ長臣相集まて議しまくまる松井佐渡守申まくるハ某年頃徳川殿の御内なる

本多佐渡守正信と親く相語らひ彼に付き徳川殿を頼
み〳〵せん徳川殿ハさる頼母しき人なれとも〳〵ませバいと
是程の事ゆく人の家亡んとするを見捨のゆハまじと
やハ忠與我日比内府と親しくもなり斯る事頼むも便な
けれども汝正信と親しかんとハ試に計をんとて松井
本多よ志ゝの事有りと徳川殿呼〳〵召其侭松井を召
き人をのけく尋問せるひ正信〳〵て唐櫃二ツ開かせ一ツ
に黄金百枚ツを入らるゝ其黄金の箱に題せ一年月を
見よと仰有て正信是を考るに此一年の内未三河に御座有
しかるにやハ徳川殿松井に向せるひ凡金銀ハ出納の司
ある事なく若人知らざる用んとする時に吾心に任せ雖
ども此黄金を貯る事斯る事を待に年久〳〵今其家の為
に吾年比の志達〳〵るこそ嬉しけれと自らなを松井に
賜ふ松井大に悦びかゝる有がゝ御事こそれハ既に亡んと
する家の斯再び継べくハ筆偏に君の御恩なり細川ゞ家の
はたん限ハいとで此情を忘るべき速に本國に下りて黄
金を上せ償ひ奉るべきよしとやハ　東照宮聞〳〵召
いやく此事世に泄聞えるんに八兩家の禍ともあれ夫故に
斯人知られ用ふべき料の物取出〳〵ゆめ〳〵償ん事然
るべくと仰せらるゝ松井殊更に悦び急ぎ帰て此由を
やはさんとて御前を立く出るより遥経て忠與其事となる
く御舘に参り御對面の序に正信を呼出し　東照宮に

向て申るハ年頃忠與が家人ゟ仰下さるゝ事謹で承り
何事のおりゝまたべきゝハれいゝとも若御家ゟ事有ん時ハ
必君の御爲國をも身をも捨て此度の御情ゟ報じなゝん
ぞるみゝくんさわなぐゝ忠與常ゟ伺公仕てゆくんゟハ本意
遂ん事叶ふべゝゝゝ是より又素此如く疎そゝくくてれべ
ゝゝまゝゝく御暇やゝく少ぬさまゝゝ年頃忠與　東照宮と
親ゝゝゝゝゝて利長を諫爭たまゝゝ有ゟ利家も一向我
家の事思ふなりと心得ゝく忠與のヤ旨ゟ從ゝまゝゝとあり
○慶長四年大坂ゟ在ゝゝる諸將の中福島正則淺野幸長黑
田長政已下七人石田と不和ありゝゝ人を使を以て朝鮮ゟ
有ゝゝ時各力を盡ゝ軍せゝゝゝ目付ゟ宣らまゝゝ福原右馬助
直高垣見和泉守家純熊谷内藏允直陳大田飛彈守政
信等私曲を構へ太閤ゟ達せざりゝ事ども憤を積て罪科
ゟ處さべき由ヤゝゝまゝゝより事起てゝ爭論甚ゝく使度々
ふ及べり七人の諸將此事きゝふ止べきや石田を討亡ゝて
も必所存を遂べゝゝの趣を石田聞て上杉景勝ふ如何
べきゝ向上杉も案ド煩ひゝふ佐竹義宣日頃三成ゟ親ゝ
りゝゝゝゝゝ是を聞て伏見より大坂ゟ趣き三成ゟ許ゟ到
てゝゟ存る旨もなゝゝ只德川殿ゟ告て和平の事を賴む
べき外謀なべゝゝゝて三千計の兵を以て三成を伴ひ
伏見ゟ趣きゝまゝゝバ諸將事を延ゝゝゝる石田を逃ゝゝる
よゝゝ既ゟ追ゝけんとせゝまゝゝふ早伏見ゟ出ゝゝんを

聞えつゝば歯をかゝてさて止まるゝ　東照宮関召太閤
在世の時ハ寵を頼まて權威を誇り無礼ふもゝぬべゝ今
を當アて諸将の申さゝ処其理なきをいかゝぞれども罪の
疑ゝ紀ハ軽くさとうや咎ぬとて強てなぐめのひろれども
尚止むべゝゝぞるべ内ゝハ今世治アゝるを弓箭を起さん
ゝや力なき事どもなり我石田と心を合せ諸将と軍を
ゝと仰らまゝよりを止事を得ざゝて怒を押へてさて
止アぬ其後今世の亂となるべきも又穏うるゝん事を
一已の所存を有べゝ暫く佐和山を退て公の万事に相たゞ
さゝる事なくて然るべゝゝん子息隼人正の事ハ我よく
家を全うせんるを計るゝゝと三成を仰らまゝうハ示きは

謝ゝて佐和山を帰るべきや否景勝を相計アゝうば景勝
我會津を帰て上らゞハ内府催促有ん其時悔アゝる体
を顕ゝて罵るなどゝゝば必軍を出さるゝゝ行がゝりを
ゝやゝとく打破らまん や固く支て戦ん其間を大坂を討
て知ゝく素より心を合する諸将を集め旗を揚らまを是
をるゝゝる謀るべゝゝも覺えゞと計ゝまゝうば三成佐和
山を趣くるゝで定めゝる三成が士大将島左近昌仲三成を勧
めゝるゝ秀家秀詮も兩端を持ゝるゝや覺束なゝん
佐和山の軍兵を計ゝる一戦を決さゝるを不足ゝまゝ一千餘
を止めゝく佐和山をちゝゝせ蒲生備中舞兵庫高野越中と
某各二千の兵を卒て風上より火をかけ所々を焔とゝて

攻うるおどるるバ内府拒きうもく引退まんきみを追詰く
軍せば爭ら打洩さべき万ふ一ッも志を遂ざるるバ潔く
御腹召まゆへ空ゝく佐和山ゟ退きるバ後悔さるとゝ益
あゝゝ居なるゝあゝゝ國を外さんるゝ口惜くゝんといひけ
まども三成ハ景勝と相策アゝ故昌仲ゞ謀畧を納ざて
止ぬ三成既ゟ佐和山ゟ趣くゝゟ及んで七人の大将拒憤涙ゟ
ゝゝば道ゟ俟ゝく討ゑるべゝとゝ云ぬゝゝて　東照宮ゟ召
今ハ打捨置ざや如何さべきと本多正信を召て仰あり正信
つらゝ思慮ゝて今日本を取て徳川家ゟ献ざる者ハ石
田ゟてこそゆへ其故ハ三成奸曲あるゆゑ人々悪ゝてゆへども
又三成ゟ與さる者も多く容易く打亡ゝ難ゝ故ゟ言を礼儀

ゟ託ゝ手を徳川家ゟかゝゝく亡さだやと存る人々ゆへだ
三成今亡て後悉く平均ゟ帰せんや諸将外ゟハ殿を敬ひと
いへども内ゟハ隙を伺ふ人もゆへん故太閤の恩を得さる豪雄
秀頼ゟ背くゟ忍びさる三成を憎むの心を移ゝて殿ゟ懐き
ゆゝゝ三成ゝゝバ殿を敬ゝ重んぜん事愈厚るべゝ
三成久ゝく人の下ゟかゝむべき者ゟゆゝゝバ頓て弓箭を
取べゝるゝ掌の中ゟ有三成敵とするゝふ足んや其時三成ふ打
勝ゆひなば殿自然ゟ勢ひを得させゆひく誰ゝ靡き従
ゆべき日本三分の二を殿ふ帰服さべくゝゝ只三成ゟ御心
を付らまさべくゝく彼を立置きゝこそゆるべゝゝめし
申ゝるを閉召入らまて三成ゞ旅程心許なゝとて結城秀

康卿をもて送らせ給ひけり

○東照宮景勝を征伐に関東へ向はせ給ふ時江州水口に御泊りあり其明の朝長束大蔵大輔御膳をまゐるべきよしにて御約束ありしに夜四ッ頃俄に水口を打出させ給ふ御輿をかく者出合ざりければ渡邉忠右衛門守綱草鞋脚半かけながら御輿のながえをかたげけるを誰ぞと仰られしかバ渡辺忠右衛門なりと申を聞召何とてかく不意に打出るを知りたるぞと御尋有ければ若年の時より御傍に仕へなる身の是ほどの事を仕まじくれや情ある御詞なりとぞ申けるが忠右衛門宵よりかくあらんとおもひまうけて御輿のふち紙枕にして臥居たりけるとや其夜土山にとゞまらせ給ひて翌日水口へハ昨夜時をうつさずして早く立はひたると仰ありけり

○東照宮景勝征伐の御時小山にて石田兵を西國に起せるよし告を聞し召前にハ景勝が勇将あるなり西國ハ皆敵なりと人々驚きまどひしに花房助兵衛職之を召て汝ハ近年佐竹が許に有て義宣が心ハよく知らんかゝる乱に二心有て軍を出しながら帰るをもや塞ぐべき又義宣謀反の志あらじとならバ起請文をまゐらせ我に見せよと仰られしに花房承て義宣ハさきにも信のある人にはんべるは子細はべらず只人心の反覆ハ父子兄弟も計りがたきに起請文ハ御ゆるさまを蒙るべしと申ければ　東照宮

助兵衛ハ浮田が家の長臣と図さりしよ器量の小ち男よと
て大息つくせるよ花房かくと後よ傳へゆきしまこ起請文を書
なくバ佐竹二心ありとと軍兵の疑を散ぜん為の仰なり
小察せずして起請文を書ざりくるこて口惜られたとひ
義宣軍を出しるりとも我何の罪ち有べきと深く怒こる
と我

○景勝を征伐をさせるよ時七月廿四日　東照宮下野ゟ
小山よ御着陣ありくる処よ其日伏見より石田三成佐和山を
出く大坂よ到り諸大名と相謀ア亂を起さの旨告る則
先陣の諸大名諸将を召まき東條法印津田小平太本多中
務大輔井伊兵部少輔を以て今度三成兵をあづる間定て

妻子くちを悉く押籠べし心中の難義察せるまぬ且豊臣
家の恩を忘る旨ゆふ秀吉の恩を請さるくゝ多
くまバやく大坂よちもむき妻子ハかく付又ハ三成よ心を寄
らまんも少も遠恨よ行くまでと仰出さまるり皆疑惑やゝ
くんとかくの詞なりくるよ上杉義春入道入菴末席ゟ有
しゝ進ゝ出福嶋正則加藤嘉明黒田長政よ向い各思慮
まも及ぶべくくに人ちをを三成よ出ゝ置只今御味方ヤ
て其質を棄バ妻子の恨世ハ誹ものゝ多べくくまで秀頼公へ
出ゝ歎くる人ちを三成模様よちくるるまバ三成と一戦
よ及ぶとも妻子の恨世ハ誹も有べくくまで人ハるまあまま我ハ
先御手を引討死を遂べくとやさまくれバ皆一同よ御味

方仕るべしと決定しぬ其座は是なりの事辨へざる人は
なほよりうるさるも素よりなれども時はあるべく義春の
片言扱群は冥ゝるとなり
又一説は一座いちざとかくをやさぐる處は福嶋正則何と
て石田は從ひ弓箭をとらんや秀頼公は疎遠ぐる
ちゝまゝだは神明は誓ひ正則御味方たらん事
勿論なりといえまゝ皆一決しそろとぶいへり
入菴は上杉弥五郎とて越後上条の城主後民部少輔といひ
く景勝の姉婿なり
義春は能登の畠山義則の弟なるを五歳の時より謙
信わゝひ置まして上杉定実は嘗とせゝまゝなり

謙信の先陣は大将なるく武名世は高し景勝新發田因幡
守治長が謀反を討く我田の城下はたゝめらるゝ討治長
切く出る景勝の先陣を放生橋まで追崩し景勝の旗本へ押
かゝる此時義春景勝の旗本の先は有しぶ日は丸の旗をとるく
三十間計先へ切出し手廻りの士ども杉原安せ鎗衾を
作りて待うけゝるに治長引退くを追討はるゝ勇將之
大坂冬の陣は二條の御城御書院は諸大名出仕の時
東照宮入菴を召上杉家の武者おゝの事ども御尋ありし
入菴詳は答へなゝを國召上杉家は軍法素より少及び
ゝ事とも深く慈ゝ入ぬと仰有諸大名列坐の中は
入菴小男なるゞ言語分明小其次第誠は懸河のごとくな

まバ諸将何まも武功智謀の人ゝなれど詞を出だりのなく
仰く感ゞ入る色なりゝまとゝや

○同ゞ月國清公朝臣の事 参議輝政 小山よりまゝ大坂の北の方より雑ゝ
使さてべきゝゝ慶長五年七月廿四日 長臣を召て其姓名をまゝて
出せと仰らる各奉ゝぬゝゝ其明る朝書付く出るよ渡邊惣
左衛門ゝゝまゝゝ公も左の袖より出せのまよ同じく
渡邊を記させるくりいうなる患難をゝ堪て事能使ゝべき
人なりとくゝ思へる故なをさゝバとゝ渡邊を召て此旨を
仰らまゝて此ハ大事の御使まてゝゝ辞ゝゝ衆議一決ゝ
まる上ハとかくの論ふ及ハざるこの仰を蒙りさて八今一人添
らまゝゝ人ハ病ゝまゝるもゝゝバとゝまゝまバ野中市左衛門を相
副らる書二通を渡させるひく仰を兼ゝまゝるゞ程なく東西の
戦あゝべきよ大坂よ赴く事ゝまよりゝぬ色の見ゝまゝまバ
公ゝゝまゝく関所を通ゝ得ゞ若殺さまゝゝゝバ吾馬のあゝそ
討死ゝゝまゝと思ふべゝたゞうちわせく大坂の屋敷よ到ら
バ今度の一番首取まゝるべゝまゝの詞ふより二人下
人も召具せゞ七月九日小山を出く其比三河の吉田ハ公の
領地なりゝよ已ゞ宿所へも立よゝゝ笠をかゝふけて忍び
ゝるゝゝ船着よ大竹の虎落をひくち
まゝゝ神職の大原左衛門大夫ハ渡邊ゞ知まるゝよみ有て
潜よ立よりゝゝ爰よて大夫ゞ下人竹をかゝげゝゝ把を
くゝり付く七八町計先まゝく此をまゝよ案内者ゝて

伊勢の堰より行く夫より雲も山も皆敵の中を忍ひ通まハ
飯を乞べきやうもなくあ〳〵朱をかく関の地蔵より行ぬ
行あふ人ごゆるよあや〳〵このたゝ関所よく殺さるゝよく
心得らまつよと曰そよりゆ関の有様伝へきくよなら〳〵通るべ
きやう〳〵ハやひもよ〳〵て伊賀越ゆやかゝるべ紀浅間越ゆや
行べ紀と二人あか〳〵ひく〳〵先伊勢の大神宮ハ祝上紀左
近が許より行く宿を借んと立よりそゝまバ今何方より参と詰る
人のあゝべきとて元あいだ左近立出く一宿の事ハさて置ぬ
とく出よ棒ふてたゝき出せと罵とゝり二人ふく紀奴かな
まちし〳〵く池田家の恩を請〳〵る身ゆゑ怒まてゝ出せんと
なく空し〳〵く立出る時左近追つい〳〵く何國の人ぞと問池田

三左衛門尉が士あり〳〵と答ふ左近ゝ〳〵バそこの川堤ハ下よ
乞食のたてゝ〳〵るかゝりをかぶりて待まてよと小声よいへバ二人
さる相もあ〳〵んとていひつる刻のめくもゝり夜ふ入て左近来り
昼の乞食ハ何國よあるとゝいふを聞てこゝよなりといふさてひそ
ゝふ相約して左近が家の裏の戸口より内ゝ入奥の一間ふ忍び
〳〵疲をやすめ〳〵り左近今ハ時家よある下人も打とゝ〳〵べ
きふあ〳〵ゑバ昼の宝ハ脱カ〳〵げあた事をやゝ〳〵るよとてひそ〳〵だ
飯をもゝ〳〵めゝ〳〵夫婦給仕をもゝ〳〵りそゝまさて道の事を
問ふ浅間越ハ人の往来ゆゝまなれバ此頃ハ女乞食をも殺しん
中く通ゝ〳〵がるべ〳〵只一命をかけ扨〳〵て伊賀越を通ら
まゝ人といへぞさ〳〵バとて荷ゝバ〳〵を扨ひ敵〳〵るたゞまゝ

身をやつし御被箱を笠に付け刀をも左近が許におきいと
見ぐるしき小脇ざしを永出して指さりかくして暁に宮川
を打渡り関所近くなりて見まゐらばゆるべきやうもなければ
一封の書をとり深田の中に深くかくし埋み其日は彼方の山に
ふしあるる朝一通の書をとりみして青草をとりて一二三の
印をし笠の緒とりて一の関所に彼方の固めなる士どもかる
大乱に伊勢に詣る者やあるとて打殺せとひしめきたり二人
はさるべきゆくより伊勢に詣て此さとりに及び一夜の宿を
かりべりしの法令にまよりいづくにまゐるべきやうもなく
進退きはまりて大坂の妻子も心元なく天照大神をたのみ
まゐらせ帰まんとたどりたどりさまよひて荷ぶくの御
被箱脇ざしの鞘を打くだき髪をとりて帯袷にてもちまで
改見てあやしき事もなきよりとて通しまゐらばに次の関所
をも事ゆゑなく打過ぎ大和の奈良に出で寺に入酒を求て
飲むるに住持の僧さうるまゐらせよとて別に彼酒を
出し又茶をも出しまゐらば悦んで二人腰につけたる銭をあさ
ふるに小僧多くして請取ずして其時住持の僧れ曰能もたどり
ありて爰までおりしまゐらば爰まで忍び来る人もゆゑど
皆関所にて殺さまゐらばよくたどりの人故ある人とおぼえさ
へと語まばニ人心の中に打驚きまゐらばでも伊勢に参りる
物語して天照大神に助らまゐて無事に下向をまゐらせて此
此より後もかくあんと氣つかひくもれいぞと答ふ僧ども

ぢくと呼て是を信ぜざるべきなるんよハ別の事もいまだ関所を事故なく通られしんよハ朋友さちよ奈良北郷ハ見つけしるものの哉とかくまでよといふ二人ゐちまでと打笑ひ出て行奈良と大坂との間ハ関所多く何者ぞと咎めるまバ又前乃ごとく伊勢ハ多くの帰路なれやといつわり番の坐上ハ多くの老人した事もなれハ通さじやといつわり番の坐上ハ多くの老人扨ないもせを是非を論ずるハ及バぢ斬て捨よと下知しるを赤座より真の家臣ハ者と思ふれを斬て棄バ神の祟も恐ありと再三いひしかバ二人危きをのがれて大坂ハ行やうと東國方の諸侍ハ屋敷ハ虎落ゆひまハし大坂の兵士門々を警固して内外の出入も絶さるべ兼て知るる材木の商家ハ

行く大根を買ひ求めや声を聞知ると打回りく大根を賣る
一ハ似しるり久保田市大夫窓より呼んくいふ渡辺ハ似るる人も
あるれといひく大根と一声よべバ渡辺久保田が窓の下ハ行て
笠をやり大根をさし出たるちふ宿をとへバ知らなりと答
く材木屋ゆるゆるゆゑ帰ると野中ハ鄙と告て悦びあへり若
原勘解由北の方ハ属てゐるる久保田かくといへバ門をやる敵
大坂の士ハこれるりく薪を荷ふ人夫三十五人を出し其中
一人を残しく渡辺を其かたりく薪を荷ひく門を通る時
警固の士此男ハ今朝出る者ハあるべと押留るる久しく
煩ひく打臥居るる快くく今日出る人夫なりとへども
更ハ入ぢ勘解由立出るさぬぐよいひ断て通て落て北の

方の前よ多り公の仰をこまゞと述て登の緒をとゞて奉る
北の方ハ簾を隔て對面ありて其後渡邊よ禄まゝあゝへらひ
賞せゝゝ事大方あゝゞ誠よ危き所を道まと得ゝゝ事ど
もとなり

○東照宮會津を伐せまふ時景勝ハ謙信の影堂れおゝく
諸將士卒ま二心有まゞ紀との起請文をまゝ妻子ちゞ會
津よあゝ焼草を積置て敵寄来らば逆よせふせんとゝく
所その地形をなゝ白川よ安田上総介を先陣とゝて鳴
津下そ齊を二陣とゝ景勝ハ只一騎背炙の嶺よ登て樵
夫を案内者まゝて山中を通り白川の境れ明神よ出兵
をゝゝ不意ふ討くかゝるべ紀道を計らまゝゝよ上杉方ふ
も此をゝゝゞまゝて寄手ハ驚もゝゝゞ　東照宮の先
陣大田原よ陣して白川より一日の行程なり景勝大よ悦
て其勢八千を率ゐ長沼よ陣ゝ寄手白川よ攻べん時山中
の間路より思ひもよゝゝぬ後よまわり　東照宮の御旗本よ
切く入萬死一生の軍せんと謀らまゝよ石田兵を起まゝよ
し用ゝく　東照宮宇都の小山より引かへさせふひゝり
○會津征伐の御時　東照宮下野小山の途中まく左右の近
習れ人そよ向ゝせゝひ我麓を忘まゝゝあまこゝゝる小竹林
よ串ゝなるべき細竹を切まゝて仰らまゝゝゝば則切てなるを
たゝゝ爺をゝゝ如させゝひ鞍の前輪よあゝく切裂く
くゝゝ付二つ三つ打ゝゝまひ景勝なゞゝを打破らんよハ是ふ

て事足ぬとのまへり実ハ麾をとすまこのふよハあ〳〵ぶ上杉
家ハ父より已来武勇の家ゆゑ景勝駿持なまこバ人をあや
ふむこゝろあるゑ景徳を侮らせのふの機を示させのひし
こやゝ然る処ゑ西國中國一同ゑ御敵なりといひふ〳〵小山
より引返させのふ時又彼竹林をとさせのふゑ上方を攻破る
ゑハ此麾も無用の物なりて棄のひそり前後ゑ大敵あま
バ人々愈疑ひもそ〳〵あゑ杉く恐〳〵ふ足ざるの機を
示しのふなるべし

○同ど時伊達左京大夫政宗ハ急ぎ本國ゑ帰てかゝめよより
攻入るべきよ〳〵仰を奉て大坂を打立夜を日ゑつだて弛下
る白川より白石ゑで皆かゝたの中なれバ道ふさがりぬ常
陸國を出り〳〵岩城相馬ゑはしかつく國ゑ帰らんとする
ゑ相馬まゝ累代の仇なり始るゑ政宗僅ゑ五十騎ばかり
引具して常州を經岩城と相馬の境ゑ到て先相馬が許ゑ
使をゝて此度徳川殿上杉を征伐しのふよりの政宗かゝ先
ゑまつり向ふべきよ〳〵の仰を兼りぬ路既ゑ塞てんひしかど
ゑやり〳〵此地ゑ馳著ぬあてりふゝやめて道をうちし
ゆゑ疲まゝ不願ゝくハ城下ゑ旅館を出ゑハ〳〵ぞや馬の足
休めて明日國ゑ帰て入んとゝ存ぜゝとせゝうり相馬長門守
義胤こまゝを竹あつゝまゝ運の尽〳〵る事ぞり〳〵さゝぬぐゝ
伊達ハ相馬ゑ年比のかゝたなりまして味方討人一方
の大将兼てゝるとゝのものをいでゝく今宵一夜打〳〵て案

内知ぬ奴原を一人も残らず討取て年比の仇を報い又今度の賞ゆと預らざやとて民家をさつらひ〳〵く迎へ入き人々集て夜討の評定しきりなり爰に水谷三郎兵衛と云者ありけれ共座をゆひるがゑ進み出て恐入てゆゑども既に会議の座に連なりてゆへば所存を残さべ紀よあらば抑窮鳥懐に入時ハ猟者も殺さじとこそ中ゆへ政宗わづの大将年来此恨をなして君を頼みて来りしを生だらわ〳〵やみ〳〵と討まん事勇者の本意にあらざ也紀弓箭の瑕瑾なるべしや又彼が國境駒が峯に至らんに行程僅に三里ゆふ日未ざ未の時にさらば政宗ら國に入んとぶふ〳〵で日夕なるべきに僅の勢ゆて此事深き慮なるべしや只此度ハよもに警固して國ゆ返し重ねて戦ひに臨ん日勝敗を天運にまかせらるべきこそやとゆへ一座の人々此議に同し兵粮秣に塩魚に和まぐ焼かをを焼て夜迴りに義亂が士ども政宗あまりゆさぐまりかへりさるまいぎ試んとく夜ふけて後馬二匹ばかりたなち人々走出ちりく坂の外ゆ出るとぎのくしる政宗小童一人に燭もたせ白紀小袖を上に打かけ左の手に刀を提さく立出相馬殿の御人やぶとりゆ見に行向へバ物音するくゆ政宗が下人原狼籍ゆるんうはまくさぶめくまりゆへとく又内にそ入らんるる夜明まを立ちやるぶで已の時ぞりに成く義亂のもとぶ使しく

一禮しさてさづめ〳〵馬を打て行ひて小人を付く窺しむ
るふかの國は境駒ヶ峯北ひのるゝふ伊達家の軍兵雲霞か
ぬくみちゝく出むらへぬかゝく關ヶ原の事終アて相馬
さゝでる上杉ゝ心合せゝゝバ亡ぶべ紀ゝ極る政宗訴へヤゝゝ
ハ相馬八年北政宗ゲかゝ紀ゝ石田上杉ゝ與しゝるゲ一
定なゝんゝハ政宗彼ゲ為ゝ敵ゝべし然ゝるゝゝ君の仰奉アて馳
下るゝゝを中て深き恨を弓すゝき新恩を施し紀彼ゲ逆謀
ゝ非るの証ゝれいずや又累代の弓箭は家永く断へ事不便
の至なりと度々なゲ紀申されしゝハ後ゝハ本領を相馬ゝ
賜ゝるゝるゝゝゝ関ゝ
○関ヶ原の時三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長

亂ハ父大坂方ゝ同心したりとゝふを聞く宇都の小山を忍び
出居城岡崎ゝ帰アるゝを國清公聞しゝ召竹村半兵衛を召
ま吾上田ゝ向る頃まで民部を牛窪ゝおさへそめ置けと
仰せらる竹村是ハ安き事ゝハゆゝゝどもいさ侍計ひて人
ゝんゝて道ゝ出迎ひ鉄炮の者を百姓の家ゝかゝ置具ゝ
支度を言ふゝめ其身ハ山のせゝゝゝゝ知ゝく待ゝ長亂来る
ゝ竹村池田三左衛尉ひそゝゝゝ申せゝヤ事のゆゝく是ゝ知ゝと
いへバ長亂馬廻りの人を遠ざけらるゝゝバ竹村静ゝ歩ゝゝ
ゝ別の子細もいゝ出ゝ笛ヤせゝ三左衛門下知しゝるゝゝゝ
云もあへゝ左の手ゝゝく長亂をひゝゝとゝゝへ一尺計の脇ざし
を抽く長亂ゝ打ゝ當ゝり從者どもこハ口をゝやと怒れた

せんとなり竹村詞をうけ近くよりまたなば吾ハ殺さるべ
しと民部殿をバ刺貫き申さん唯われ留ヤのこゝろ別乃
事ハいはぬと呼はりける処に百姓の家に伏置る鉄炮の者
ともかけ集て鉄炮を長亂に当て竹村を討んとなゝべ
忽民部殿を打落し申さんと声々に呼はりて長亂力あく
竹村に従て百姓の家に入バおし止て四方を堅く守ける
かゝる　東照宮聞召て父既に味方に成る上ハ申うけ
と仰られつるば長亂則出まゐり後に公に遭てあら
き有さまゆゑあり世のひろるよといとれしこうや
○岐阜の城を攻る軍評定の時國清公大手に向ふと仰られけ
るに福島左馬之大夫正則閣く吾こそ今度の先陣なれとぞあ

らそそまるる井伊本多公に向ひて内府の御縁者たり譲
らまほしへと有るまバ正則ハ尾越より西美濃に入て大手に向
ひ公ハ河田の渡より寄せ給ふ定りやく有て正則
搦手へ吾こそ向ひれたゞん尾越ハ城に遠く河田ハ遠浅なれバ
馬にて渉て易るべし大なる向ふも城を早く攻破らん
為なるまバ只搦手よりよせんものをとやさゝるを井伊本
多正則の領地なるまバ大手より船筏を以て渡さるゝ
事安るべし三左衛門尉ハかゝるよりの向ふまゐ既に定
つる上ハ今更かゝんも悪るべうゝとやさまゝ
ハ吾敵地に入て相図の煙をあげく後池田殿川を渡され
よといひく大手に向たまゐり頃ハ慶長五年八月廿一日

まぶ霄ぐるまよ公ハ清洲をうち出河田のいくわ小陣をゆくれバ廿二日の暁よ川涯よ打寄のへバ伊藤五郎右衛門と云もの瀬ぶくゝるとゝへり岐阜より津田藤三郎を始として彩加納村よりゝ出して陣ゝ寄り味方の軍兵勇ミ進んで早川よ打入んきゝきなり公馬を乗出ゝ今ちゞゝそと下知せさ勢のふ此時貝福右衛時ハよりぬとゝ甘バ公然るべゝと宜ひる刻の下よりさうまく波よ馬をさゝと打入二三間歩ませ鞍ぢよりさゞり貝よ川水をそくゝて打うつゝいるゝも高く吹出て宝螺乃聲諸陣よひゞきゝる是より一同よ打入て一騎も残らゞ向の岸よ打上原

須賀平四郎物見よりゝ乗帰て敵の多少ハ芦原ゝ

隙あて見えゝるゝゝゝゝ二三千よハよもゝ見ゆ軍ハ味方の勝と申ゝ子細ハいゝかと問のへバ須賀敵の後陣續うゝ後よ兵を伏べき地十町計がわゝよりのゝべゝとも存ぜゝゝ遥よかけ来ゝるなバ人馬の息切まてよゝ見ゝるゝゝなるべし

と申ゝもさてゝぬよ伊木清兵衛忠次味方の旗ハ前よかゝゝなき陣の色ゝ紅ゝゝゝゝ敵ハ後よ仰て人の面白くゝゝ必定味方ゝ勝なりとゝきみゝゝり

公味方の陣を整へよみぐりよまてゝむ事と下知ゝりゝれども

なゝどゝゝめらよべゝ吾れゝゝゝゝゝと進ゝゝゝく事三町ゝゝゝり

公今ハ時ゝよきまゝと腰よ挿ゝる磨を取て一ふりぬゝゝせゝへバ一同よゝどゝと打ゝくかゝり忽敵を撃破らまゝゝゝ八田

太郎兵衛久次北る敵を追ひけるに朱色の物具にて紫のおどしかけたる武者一人息つき居るを見て馳寄りかの武者ハかち立ちあがひたるを折しく八田馬より飛下り鎗を合せ遂に討取りしを見て前田半左衛門なり

半左衛門ハ徳善院の従子にして岐阜中納言秀信の近習の臣なり打見たる處ハすぐれて温柔にして常ふよく論ふたへたる人なりしかども男子なければと笑ひよ此日の軍に敗軍の中に武市忠左衛門と二人ふたりより引立たる味方をそげまし〳〵ぬけやつぢと呼ばり目を驚きたりて武市も討死して日比前田を侮りたる者どもそこに前田に及ぶべきやうもなしとぞ

八田ハ父を弥三右衛門正久とて士大将なり太郎兵衛今年十八才父の陣代にして前田を討たるに従者柏原李右衛門尾関弥五左衛門なりけ来たりて八田を馬に乗ふて帰れ八田後に人に語りて曰く年若く血気にはやりて敵一人討取りてさのみ疲るべきにあらざるに其時出すけ来る敵あらば小児にも生捕とせらるべし死生の間に立て敵を討ばとく勇気のたるべきなり故なるべしとぞ悟りたる慶長六年禄二千石を増与へられ同八年公参議に任じ奈内の時久次太刀の役にて従五位下に叙し丹後守と称して後豊後守と改む前田利長久次が武名を聞一万石にて招きたらどもゆるさずとあり

福嶋正則ハ大手の惣大将なれ共素より他人に超られまじと
思ひ詰て公既に新加納なる敵を撃破りとんぬき怒をも
なべて北三日の朝先陣にて攻寄せる池田家の軍兵朝日口
より攻入るを惣ぐまへの土手此上より見て人に功名を嫉
道全といへる法師武者に下知して町口に火を懸させられど
搦手の軍兵烟に むせびて進を得ず公是を御覧じてこハ
心得ぬ事なり火のまゆるを待べきにやとて来木畑を
めぐり長良川より後に水のまに〳〵池田吉左衛門ハ
公此城に居せ〳〵時水門に居て案内ハよく知つ水ぬきの有
るより入べく水門を打破て旗を差あげ池田三左衛尉
本城の一番乗と呼ばるを正則の道を妨らるハ却て
池田家の幸と後に人いへり　東照宮御書を賜て敵
軍川を隔て相支る所に輙く打破て岐阜を攻落さるべ
功名賞せらるべ認なりとぞ書せ給ひける

○岐阜中納言の士飯沼小勘平といへるハ四天王と世にいはるる
剛の者なり新加納の軍破るる時小き堤をおのれ
居さるべ小池田家の士大将森寺政右衛つ忠勝が第四郎兵
衛長勝飯沼を目がけ一間あまりなる溝を馬に声かけて
ひらりと飛せるに飯沼が左右より鉄炮を打懸るまでも
甲冑に あるべく其身ハくもに負ず競ひかゝるぶ敵ハ多勢
なれ共やがて飯沼が者どもちりぢりになりぬ森寺馬を
乗なまバ飯沼名なまと刻をかくる池田が内の森寺四郎兵衛

と名乗る飯沼池田が内の森寺あゝばいぎといふより刀を抽き水ちが馬より下んとする処を右の膝口を切さうゝゝバ森寺左の方へ飛下て馬を隔て切合ひるが又左の腕へ疵を蒙り今ハ叶ハじと思ひ白刃を握て掌をゝゝまるがら無手と組飯沼をおさへ透さず刺通せゝが疲まして首を取ゝまでも既へ人へ奪るべうゝゝふ従者久吾衛といふ者走て来り近づく者を追たゝひ馬へ撥のせゝ奥國公武藏守利隆朝臣の事此時新藏と称しけん十四五騎ゆくひくのふ者へ奉りゝかゝゝに又國清公の御前へ参りゝく飯沼を組ぐ討くいとゝ子ゝを飯沼が曽ハ小田原鉢刀ハ行光の作脇差ハ菊一文字なり森寺が後者分捕ゝて今森寺が許へ有といへり森寺ら

飯沼を討取ゝ事関ケ原記其他のすべふも池田備中守とゝてもるせるハ謬なり

○岐阜の城攻へ池田家の士南部越後門陽へ押結ゝゝふ門ぬくぐり狭くかゝるるちろへ支へゝ入得ぐかゝより母衣串をめりゝく入べゝとゝいへどもいやゝゝたゝ入得ぐとも此ろハぬゝまゝぐゝと呼るる其中へ門ひゝきて独入ゝり其武者ぶり甚見事なりゝゝと元祐の人いひゝとなん

○岐阜の城へ諸将おゝゝまる時一柳監物直盛の兵一騎先駆ゝて川へ馬をさゝと打入ぐり直盛へ付ゝまゝる目付兼松又四郎正儀九尺許の十文字ゝ鎗を提鹿毛なる馬へ乗て堤の上へひゝて是をゝんあそゝま剛の者へ若武者ら若武者ら

と問ふに直盛ゆゑて安井新九郎とて今年廿二三ばかり成
ひとりとそふ正儀吾たるべ功名をいそぐべきは若武者な
ればこそ惜き事よくいひて終らぬは安井向の岸に待うける
敵の中へかけ入て討死しをり直盛馬を蹴てて進むを
きたのかんえもを正儀おもへ止め早くいとてやく有てこそ
云まゝに馬を川へ打入らるゝをば直盛もおとゝゝ渡さ
まをり敵敗北しをるは正儀鬨魔堂のこゝまで追かゝる
味方をおとゝもむる直盛なほ追討ぎやと問ふに敵ども陣を
整へをり引ん方一定味方崩るゝ百々木造ハ岐阜の
古兵なれば引ふと思へども地の理なるゝ退くなるん今
見らるゝは返さゞるゝといひも終らぬは竹林よりて鉄炮を打

かゝる正儀少しもさゝとゞず相向ふ事ならゞゝく有て城兵遂ま
引退く

一説は津田藤三郎光房ハ秀信の士なり敗軍の中より引退
朱の物具に赤ちろけ鹿角の立物打たる曽を着月
毛の馬に乗て引色に成る味方を勵まし戦ひ
を兼松又くよれ敵なりと目をかけて追ひけるを
間十間許になりて津田光房引返して城へ引入り
黄母衣うけたる武者取て返して正儀と互に合戦ひ
相引に引くといへり此時なや又前に川を渡ゝる舟の事
なりや詳なるゝぞ
正儀敵是をゝく一面目有ふ似たり此より返さゞとゝ

直盛岐阜の町口まで将机を倚く鎗を横たへ敵出バ一鎗せんと正儀の方を見やるまでも正儀いや敵ハ出ぬハヾと云
よ果して軍ハなるほど亂ちぬまでも後直盛正儀を饗
今度の軍毎事仰の中ゆへ中ゆも安井ゞ討死を遂せられ
ハいうみる子細まゝと問まゝ正儀関て死生有命とやらていら
で人力の及ぶべき所にあらず川を渉て先陣する耐る馬の
ひげ場二三十間も泳ぎく敵の前を横さまよる兼てのる味方
はぐく時大音よ名乗べき事なれ左なくく唯一鎗岸ゆ
上て敵の真中よかけ入討死ゝ敵ゆ利を得さするゆてん
時よより地よより進退のたゝかひなりと能老兵よ
兼て置てんかゞよ六十よ及ぶく抜ちぬく武功をも遂いとぞ

語らまさりける
台徳院殿御上京の時熱田よて國士御目見よ出る時兼
松も図ゞくしらる土井大炊頭利勝を以て今川義元合
戦の時功名利根山よく信長ゆり足半を賜て事猪
子内匠兼松と年ハいづまゝくるやと御尋あり御覧
よハ猪子を年まゝと思召との事なり兼松兼て信長義
元合戦の時朋輩七八人一所よ打立れ馬を乗ふてくなる
いる事と見へバ鐙を逆よ掛けゝり心中よ不吉とおもひ
其日勇みなく進み兼いへバ功名くる者ゆをぬきぐ
思苦くして朋輩ども取る首の血を甲よ塗草摺よ泥
をあり朋輩の中よ交て信長の前よ出ればバ義元の首を信

長見て悦ぶ時よ為り合ひ刀根山よりく前夜觸有り
よりく信長を待ち打立ちる為草鞋とく間もなく
跣まくかけ付首取ればこれ信長なくく太刀はさやを付られ
ぬる足半を賜ふ忝なきよさぜる事もなく上る利勝猪
子と年はいふと問ふるとそれは御見ちがへなり内匠はられ
より二つ若くと云ふ利勝御覽を御自慢の事なるばこそ
くとやきもちやばよかりなんといふ兼松いやく詐は申さ
まじと答へるまふ利勝やさまくばこそ大よ御感有て時
服ふ黄金を添く賜はりそるとぞ

○河田の渡をこく岐阜よ向ふ前堀尾信濃守忠氏川岸よ
陣せる池田家先陣の士大將伊木清兵衛忠次使を以て池田

が者ども川よ打入て後渡さるべ今度の先陣は池田が兵ま
るるてんとて申そる忠氏聞く暫く馬より下立く吾下知を
待ちへくいそまるれば山田多門兵衛十五歳軍はゝ始なり
馬より下んくすを従者馬より下るるやん鞍の前輪よ立付
俯くよ加く待せるまるよと教へくば山田ちくくそるふ
やくこるく忠氏の旗本よ宝螺のあるせくば我先よく馬よ乗
よ山田真先よ川よ打入く渡くるぶ遂よ一番首を取るは
従者のあなるまるる故なりそ後小吉晴此日の勝軍ゝ告
を聞首帳をそくまふ首一ツ山田多門兵衛とちくくるを
讀も終らぐ近きよりて竹馬よ乗ふる童のそや功名くそる
よ父なぐくく居くんよはいるぐる悦んよて涙を流さる

十二ノ九四終

なり又掬(カクベン)権八が功名の無(ナキ)ハいふ討死せんハ知(シ)らぬ功名は
二三人の中をもづる者(モノ)よりもぬけ出でとゝのやしまれしふやぐく
飛脚(ヒキヤク)来て権八一番(イチバン)よつぐいて首(クビ)を取りまでも手負(テオヒ)て帳(チヤウ)よ
記(シル)して事(コト)おそくなりと告(ツゲ)らるゝまバ吉晴(ヨシハル)吾(ワガ)見る面よも違(タガ)ハ
ぬ事なりひつるまと云(ハ)まゝ

常山紀談巻之十二終

早稲田大学図書館
011688998141